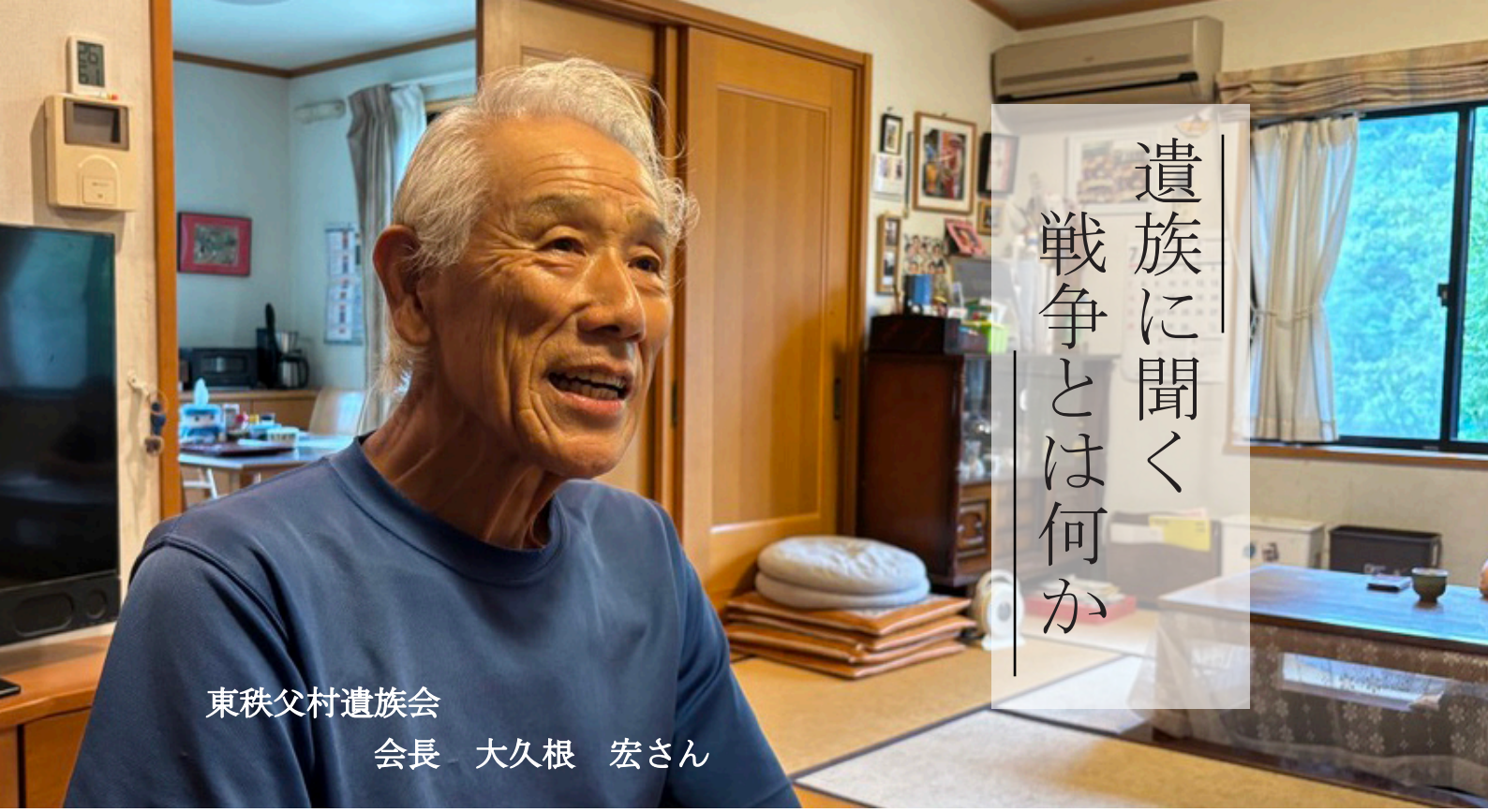

遺族に聞く 戦争とは何か

東秩父村遺族会
会長　大久根　宏さん

大切な人を戦争で亡くす悲しみ

私は戦争を経験していませんが、叔父が太平洋戦争で戦死した戦争遺族でもあります。

父の弟である叔父は、私が3歳の時の昭和19年8月頃、テニアン島で作戦中に22歳という若さで戦死しました。

当時は、平均して1家庭に1人徴兵され、太平洋戦争では、我が家からは亡くなった叔父が海軍で通信兵として徴兵されました。

私自身、叔父が戦死したことを知ったときは、大事な家族が苦しい思いをしながら南海の孤島で亡くなり、それを思うと私も子どもながらにどんなに苦しかっただろうと胸を痛めました。

また、同じく戦争で大切な人を亡くした知人は、海外で亡くなられたご家族の遺骨を持ち帰り供養していたという話も聞きました。その亡くなった方も、海外で栄養失調で亡くなったそうですが、ご家族に宛てた遺書を苦しい状況ながら残していたそうです。

戦争では、攻撃を受け亡くなった方や特攻でも何人か亡くなった方がいらっしゃいましたが、戦争末期になると食料もなく栄養失調で命を落とす方もいました。食料の海上輸送も難しかったため、1日70グラムのお米しか食べることができなかった戦地もあったと聞きます。

そのような困難の中、自身の身を削り戦っていた事実を後世へ語り継ぎたいと常に思います。

戦争で感じる悲しい、苦しい思い

東秩父村でも、特攻隊で敵船に体当たりをし、亡くなった方がいらっしゃいます。今では考えられませんが、当時は上官から命令が下ればその通り動かなければいけない時代でした。

そのため、その身を犠牲にし散っていった方が多くいたのです。

戦争で悲しい思い、苦しい思いをしたのは残された家族も一緒です。自身や家族を守るために必死に生きていました。

私も幼いながら、空襲の標的にならないよう、電球に明るさを抑えるおおいをかぶせて過ごしていたのを覚えています。

また、当時の明かりは石油に浸した灯心に火をつけていて、すすが出てしまうためそれをきれいに拭いていました。

平和のために

父も昭和12年から3年間、日中戦争で中国に赴き、鉄道連隊だったため線路の設備等に携わっていましたが、無事帰還することができました。

父も戦争経験者でしたが、太平洋戦争では戦争に赴く人たちを送り出す仕事をしていたため、戦争の話をあまりすることはありませんでした。

もう少し時が経てば、戦争での経験を語ってくれたのではと感じることもありましたが、父も亡くなりそれは叶わなくなりました。

終戦直後も、大切な家族を戦争で亡くした方は多く、その傷を癒すのにも時間がかかったのを今